是曉光を知らず　是残夜の色を抑む　但覚ゆ一片の清　新涼肌骨に徹す

《大意》朝かと思って起きたが、まだ夜は明けていない。ただ何か清々しさを感じるのは、初秋の涼しさが肌にしみるからだろうか。

（趙翼詩・夜起）

分に安んずれば身辱めなく　機を知れば心自ら閑なり

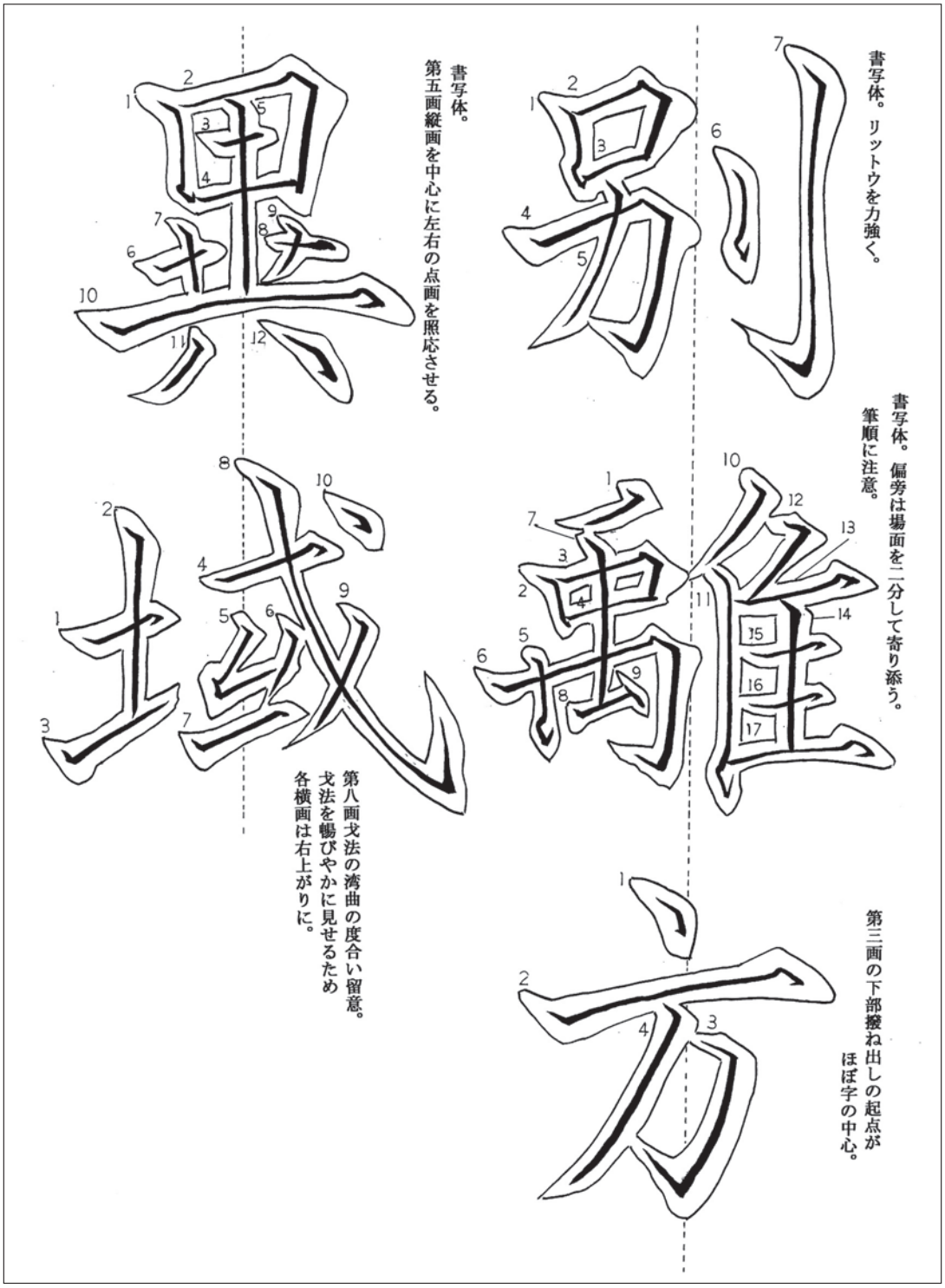
《大意》自分の身の程をさえ守っていれば恥辱を招くことはない。物事のきっかけを知れば心は自然とのどかである。（邵康節詩句）

読み　別離 方に異域なりて（お別れしてしまえば、まさしく別々の世界の住人となるのだ）

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。



連月課題

王維詩
「送秘書官晁監日本国」

積水不可極
積水極む可からず

安知滄海東
安んぞ滄海の東を知らん

九州何處遠
九州何れの処か遠き

萬里若乘空
萬里 空に乗ずるが若し

向國惟看日
国に向って惟だ日を看る

歸帆但信風
帰帆 但だ風に信す

鰲身映天黑
鰲身 天に映じて黒く

魚眼射波紅
魚眼 波を射て紅なり

鄉樹扶桑外
郷樹 扶桑の外

主人孤島中
主人 孤島の中

別離方異域
別離 方異域なりて

音信若爲通
音信 若為か通ぜん

行　書

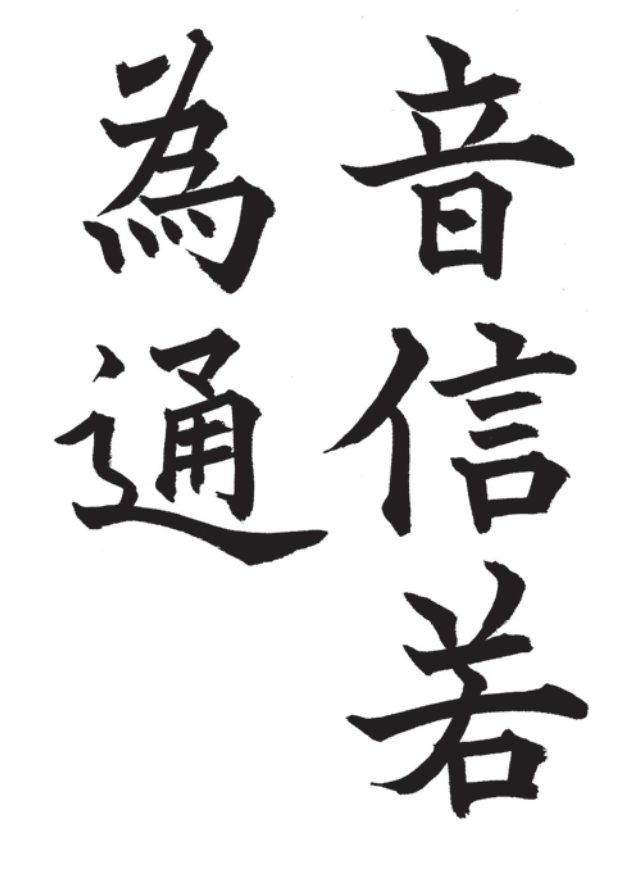
※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

草　書

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷　書

次号課題

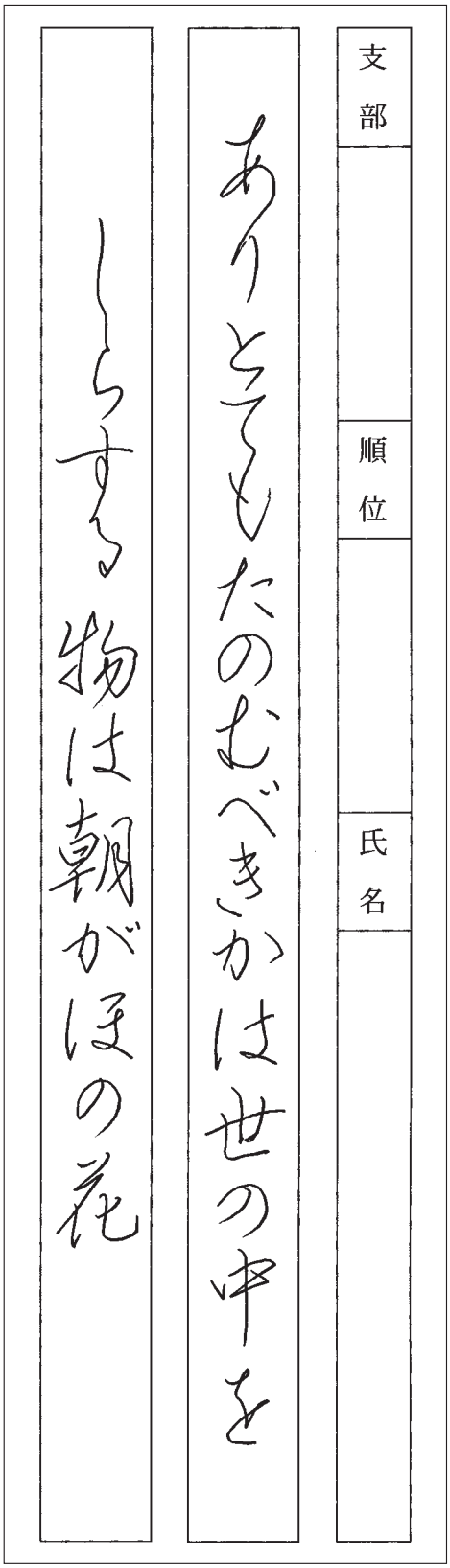


音信　若為（いか）でか通（つう）ぜん

ペン字部課題　（9月30日〆切）

細字部課題　（9月30日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）



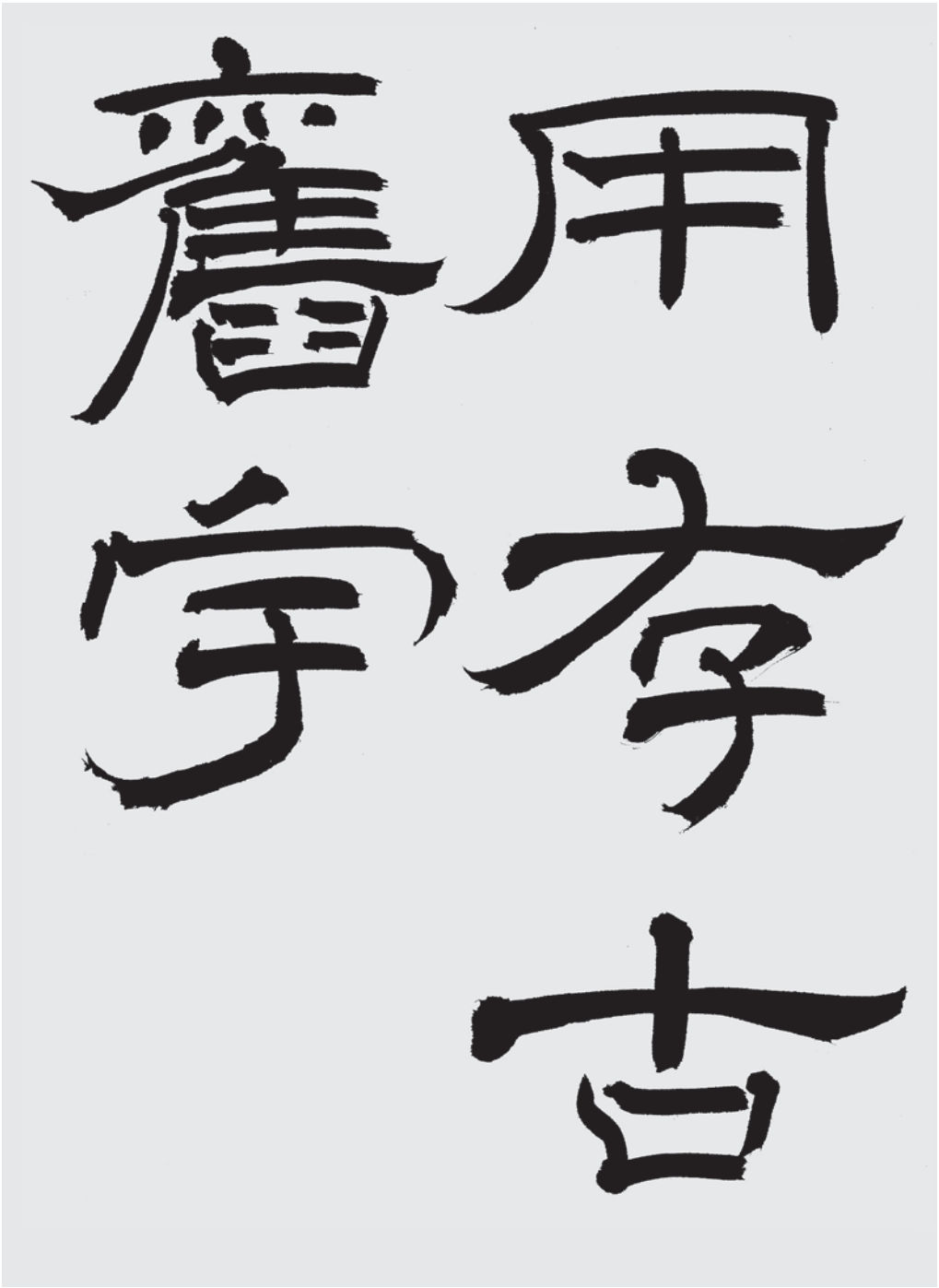
和泉式部

和泉溪石先生書

佐藤象雲書

音　ケンオンサツリ　カンボウベンショク

略解　人の音声を聞いてその理を察し容貌を見て喜怒哀楽を弁別せよ



用。古の旧字を存し……

■禮器碑（後漢・西暦一五六年）の臨書（26）

象雲臨

『用存古舊字』

禮器碑は山東省曲阜の孔廟碑林に現存しています。清時代の考証学者、王澍は著書「虚舟題跋」の中で「禮器碑は漢の隷書の正統であり、隷書の神品」と評しています。さらに王澍が禮器碑の書風を分類して「此の碑の書五節あり、体は凡そ八変す。」として「五節八変説」を唱え、碑中の書風が同じではなく書き手が違うような変化があることは前回述べました。五節のうち第一節は碑の序文にあたる場所で、熟達した用筆で結体、筆力とも充実して素晴らしく、あらゆる美が備わっていると絶賛しています。

今月勉強する五文字は銘の部分で第二節第二変の箇所に相当します。この部分は、結体、用筆は充実していますが、線が序文より細くなっています。王澍はこの部分を「銘は則ち矜意やや解け、清超絶塵、幾ど筆紙に著かざらんと欲す」と表現しています。線は細いものの清く澄んだ繊細な線で構成されています。この風趣を念頭に習ってください。

（天地の）陰陽に苞（つつ）まれて……
※乎は前置詞で訓読みしない

象雲臨

■王羲之・集字聖教序（唐・西暦六七二年）の臨書 (11)

『苞乎陰陽』

唐の太宗は、晋祠銘と温泉銘の二碑を王羲之風の行書で自ら書いています。この二碑は行書体を用いた最初の碑と言われます。集字聖教序は僧懐仁が二十数年の年月をかけて王羲之の字を集めて作った碑ですが、その集字という作業の苦労は書丹とは比べものになりません。さらに聖教序を当時目新しかった行書碑を王羲之の字で作ったところに大きな意義があったようです。

当時の碑文上には、碑を制作することに携わった人の名を遺すのが通例です。まず碑の上部の篆書で題書した篆額の筆者名、次に撰文で、碑の文章の作者名。そして書丹した人の名前です。しかし、集字碑となると石工の技術が大切です。この碑の最後には、勒石という字を縁取りして石の上に貼り付ける工人と、刻字した工人の二人の名前が刻されています。

今月は四文字を臨書しますが、陰陽の二文字はこの一節の前後にも登場していますが、同字ではなく変化していて、懐仁の労苦がわかります。